日本シリーズ殺人事件

西村京太郎

講談社

日本シリーズ殺人事件
西村京太郎
© Kyotaro Nishimura 1986

1986年10月15日第1刷発行
1990年10月12日第7刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01
電話 東京(03)945-1111(大代表)
Printed in Japan

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義
製版——株式会社廣済堂
印刷——凸版印刷株式会社
製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。 (庫)

ISBN4-06-183850-4

講談社文庫

日本シリーズ殺人事件

西村京太郎

講談社

目次

事件の始まり 5
第一の殺人 24
十月二十九日 44
後楽園球場 63
同点ホームラン 82
十九歳の女 102
血の報復 123
新たな殺人 145
反撃 164

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

移動日 184
男と女 203
西部球場 223
ネオンの罠 242
第四戦 262
逆転 282
潜入 302
最終戦 321
最後の賭け 341
解説 郷原宏 369

事件の始まり

十月に入り、プロ野球日本シリーズが、近づいて来ると、梶大介は、自然に落ち着かなくなってくる。

梶は、十三年前、九州にフランチャイズを持つ西日本ジャガーズの若きエースだった。

九州の高校を卒業した梶は、地元ということもあって、西日本ジャガーズに入団した。

身長百八十二センチ、体重七十五キロ。当時としては、恵まれた上背を持つ十八歳の左腕投手は、入団一年目に、十五勝をあげて、新人王になった。

以後、十七勝、二十勝、二十五勝と勝ち星をあげ、文字通り、ジャガーズのエースとなった。

もっとも華やかだったのが、昭和四十五年だった。二十五勝をあげた時である。

左腕からの快速球と、鋭いカーブを駆使して、梶は、ジャガーズのリーグ優勝に、貢献した。

日本シリーズでは、名門の東京エレファンツとの対戦になった。

当時の東京エレファンツは、日本シリーズで五連勝し、無敵を誇っていた。二十勝投手四人を擁し、チーム打率も二割八分三厘というすさまじさだった。

この常勝チームに対して、西日本ジャガーズは、梶一人で、立ち向かったといってもよかった。

頼みの打線が、抑え込まれ、他の投手が、めった打ちにされたからである。

結果的に、西日本ジャガーズは、二勝四敗で、東京エレファンツに敗れたが、梶一人が二勝をあげて、敢闘賞を受けた。

だが、この時、梶は、肩を痛めていたのである。

翌年、梶は、相手をシャットアウトしたかと思うと、次のゲームでは、同じ相手に、めった打ちにされるといった具合で、好不調の波が激しくなった。

それに追い打ちをかけたのが、プロ野球界を襲った黒い霧事件である。好不調の波の大き過ぎる梶は、マークされた。

打たれるのを、肩の痛みのせいにするのが嫌で、監督やコーチに黙っていたために、梶は、一層、疑惑の眼を向けられることになった。

四十六年の七月に、梶は、暴力団から、大金を受け取り、八百長をやったという疑いで、突然、コミッショナーから呼びつけられた。

暴力団西竜会の幹部が警察に捕まり、その時、梶に二百万円を渡して、八百長を頼んだと自供したというのである。

梶には覚えのないことだったが、弁明は認められず、彼は、プロ球界から、永久追放されてしまった。

それから十三年、今、梶は、東京で、プロ野球とは全く無関係な、小さなクラブを経営してい

るが、それでも、日本シリーズが始まると、やはり、昔を思い出して、血が騒いでくるのである。

今年、一層、梶を落ち着かなくさせていたのは、西日本ジャガーズが、東京に本社を持つ鉄道会社に買収され、東日本ジャガーズと、名称を変え、その新しいジャガーズが、日本シリーズに出場することになったからだった。

ジャガーズは、長く九州の球団として親しまれていたのだが、そのため、梶は、九州に知人が多く、彼等と、顔を合わせるのが嫌で、東京へ逃げて来たのである。

奇妙なもので、その梶を追いかけるように、ジャガーズも、東京に移って来た。

ジャガーズには、梶と同時期に活躍した選手の何人かが、今も、コーチや、スカウトとして残っている。

新生ジャガーズが、十四年ぶりに、日本シリーズに出場するので、梶は、ダグアウトに彼等を訪ねて、激励したかったが、永久追放の身では、それも出来なかった。

テレビを見て、激励するより仕方がないと思った。

梶が、新宿歌舞伎町に持っているクラブの名前は、「ナンバー24」である。梶が、エースとして活躍した西日本ジャガーズでの背番号である。

小さいが洒落た店で、若いホステスを、五人ばかり置いている。パネル写真などは飾ってなかったから、マスターの梶を、元プロ野球選手と知っている客は、あまりいなかった。

十月二十六日の水曜日。日本シリーズ開幕の三日前である。

午後九時頃、梶の店に入って来た女がいた。

女性でも、酒を楽しむ者が多くなったが、それでも、ひとりで、クラブにやって来る女は、そう多くはない。
カウンターの中にいた梶は、最初は、珍しい客だなと思って眼をやってから、急に、「あッ」という表情になった。
立野佐知子と、わかったからである。
いや、今は、今井と結婚して、今井佐知子になっている筈だった。
今井は、梶と一緒に、ジャガーズの投手をしていた男で、今も、ジャガーズで、ピッチングコーチをやっている筈だった。
佐知子は、薄暗い店の中を見回してから、梶を見つけると、ほっとした顔になって、カウンターに、近寄って来た。
「やあ、久しぶりだね」
と、梶の方が先にいった。
今、彼女は、三十四歳になった筈だが、昔のように、若々しく、美しく見えた。
「本当に、お久しぶりね」
と、佐知子は、微笑したが、急に、きまじめな表情になって、
「梶さんに、お願いがあるんです」
「どんなこと？　今の僕が、君の力になってやれると思えないけどね」
「私を助けて下さい」
梶は、すぐには、返事をせず、バーボンを、佐知子の前に置いた。

「君は、確か、これでよかったんだね」
梶は、そういって、自分は、水割りを、口に運んだ。
「私を助けて下さい」
と、佐知子は、繰り返した。
「僕にいうより、彼に頼んだらいいじゃないか」
梶は、そっけなくいった。
梶が二十三歳、彼女が二十歳の時に、二人は、当時のジャガーズの監督の紹介で会った。
梶が、エースとして活躍し、得意の絶頂にあった頃である。二人は、熱烈に愛し合い、結婚間近と、スポーツ新聞に書かれもした。
もし、梶が、八百長の嫌疑を受けて、プロ球界から追放されなければ、当然、佐知子と結婚していただろう。
だが、あの事件が、全てを狂わせてしまった。
永久追放処分を受けた梶は、エースの座も、佐知子も、失ってしまったのである。
二年後、佐知子が、同じジャガーズの投手の今井と結婚したと聞いた。
今井は、大学出の技巧派の投手で、毎年五、六勝の勝星しかあげられなかったが、頭が切れたことで、投手としての寿命が終わってからも、ピッチングコーチとして、ジャガーズに残っている。
「主人には、頼めないのです」
と、佐知子が、いった。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

「どうして？」
「正直にいうと、主人のことで、助けて頂きたいの」
「今井が、どうかしたの？」
梶は、今井の顔を思い出しながら、きいた。野球選手としては、線の細い男だった。顔立ちも、ハンサムだが、強さはなかった。
佐知子が、何かいいかけたとき、奥で、客の一人が、カラオケで唄い出した。
「どこか、静かなところで、お話したいんですけど」
佐知子は、小声でいった。
「じゃあ、外に出よう」
梶は、彼女を促して、店を出た。
ここ歌舞伎町のあたりは、これから賑わってくる。
梶と佐知子は、人波の絶えない通りを抜けて、花園神社の方へ歩いて行った。少しずつ、歩道に、人の姿が少なくなってくる。
「今井に、何かあったの？」
歩きながら、梶が、きいた。
「主人が、誰かに、脅かされているらしいんです」
佐知子は、声をひそめていった。
「誰が、何のために、今井を脅かしているのか、教えてくれれば、助けてあげられるかも知れないが」

「それが、わからないんです」
「しかし、脅かされていることは、わかっているんだろう？」
「ええ。ここ二日、毎日、夜中近くに、電話が、かかってくるんです。主人が出て、何か話しだすと、決まって、苦い顔になって、考え込んでしまうんです」
「彼に、どこの誰からの電話か、きいてみた？」
「ええ。でも、主人は、友人からで、何でもないんだと、いうだけですわ」
「何でもない電話が、夜中にかかってくるというのは、おかしいね」
「私も、そう思うんです。でも、あまり、しつこくきくと、彼は、怒り出してしまうので――」
「今までにも、そんなことがあったの？」
「いいえ。最近になって、急になんです」
「問題は、電話だけ？」
「いいえ。手紙も来たことがありますわ」
「どんな手紙？」
梶は、歩きながら、煙草に火をつけた。
「主人宛に、女の名前で来た手紙なんです。親展となってたので、私は読まずに、遠征から帰って来た主人に渡しましたわ。彼は、黙って読んでましたけど、そのうちに、顔色が変わったんです」
「女から来た手紙で、顔色を変えたというと、その女と、問題を起こしたと考えるのが、常識だが」

「私も、最初は、そう思って、カッとしてしまいましたわ。てっきり、主人に女が出来て、その女から来た手紙だと思って、主人にきくと、何でもないの一点張りで、その手紙をかくしてしまったので、なおさら、怪しいと思ったんです」
「その他には？」
「それから、四日ほどして、今度は、同じ女の名前で、ハガキが来たんです。それを、持って来たので、見て下さい」
佐知子は、立ち止まると、ハンドバッグから、二つに折ったハガキを取り出した。
梶は、そのハガキを、街灯の明かりで、読んだ。
「竹下冴子」という名前の差出人だった。
いかにも女性らしい、きれいな字が並んでいる。

〈先日お願いしたこと、必ず、実現して下さい。ジャガーズのコーチのあなたなら、お出来になる筈ですわ。もし、やって下さらない時には、こちらにも、覚悟がありますから。
美しい奥さまに、よろしく〉

「このハガキは、今井に見せたの？」
「いいえ」
「なぜ？」
「見せないで、その竹下冴子という女に、会いに行ったんです」

「それで、女に会えた？」
梶がきくと、佐知子は、小さく首を振って、
「いいえ。そこに書いてある住所は、でたらめだったんです。いくら探しても、見つかりませんでしたわ」
「なるほどね」
梶は、もう一度、ハガキの文面を読み返した。
ストレートに受け取れば、関係のあった女が、今井に、何かを要求しているとしか考えられない。
金をよこせといっているのか、それとも、子供が出来たから、認知してくれと要求しているのか、覚悟があるというのは、世間にばらすということなのかも知れない。
「夜中の電話も、この女からだと思っているんだね？」
と、梶は、きいた。
「ええ。ただ、一度は、最初に私が出て、その時は、男の声でしたわ。だから、それは、彼女の身内の男が、かけて来たんだと思っていますけど」
「明明後日（しあさって）から、ジャガーズは、東京エレファンツと、日本シリーズだ。そんなときに、ジャガーズのコーチが、スキャンダルに巻き込まれるのは、まずいねえ」
「ええ。新しい監督さんは、そういうことに、絶対、うるさい方みたいなので、どうしてよいのかわからなくて、梶さんに、お願いに来ましたの。助けて下さい」
佐知子は、じっと、梶を見つめていった。

十何年か前、彼女は、同じような真剣な眼つきで梶を見たことがあった。だが、意味は、全く違っている。あの時、彼女の眼は、梶に対する愛で燃えていたのだ。一見、同じ眼だが、今は、その愛は消えてしまっている。

「じゃあ、今井に、偶然のようにして、会ってみるよ」

と、梶は、いった。

「君にはいわなくても、男同士ということで、内緒の女のことを、話してくれるかも知れないからね」

「お願いします。今のままだと、主人は、参ってしまって、日本シリーズで、何の働きも出来ないんじゃないかと、必死なんです」

「二十九日からのゲームに備えて、コーチも、練習に参加している筈だね？」

「ええ。朝九時に、車で出て、球場に行きますけど」

「その時に、会ってみよう」

と、梶は、いった。

佐知子は、遅くなると、夫に心配をかけるといって、タクシーをとめた。

「梶さんの奥さんて、どんな人かしら？」

と、彼女は、タクシーに乗る時にきいた。

「いま、ひとりだよ」

と、梶はいった。だが、タクシーが走り出してしまい、その言葉が聞こえたかどうか。

永久追放処分を受けた梶は、二年間、処分が解けて、もう一度、投げられるのを夢見て、たっ

た一人で、トレーニングを続けた。
しかし、いっこうに、処分は、撤回されなかった。梶のために、球界復帰の署名運動をしてくれたファンもいたが、それも、無駄に終わった。
三年目になって、梶は、とうとう、球界復帰を諦らめ、東京へ出て、水商売を始めると共に、一人の女性と結婚した。どこか、佐知子に、面影の似た女で、名前は、今日子といった。
一年半ほどの結婚生活があったあと、どちらからともなく、別れ話が持ちあがり、彼女は、別れて行った。以来、梶は、ひとり暮らしを続けている。
まだ、四十前だし、頑健な肉体を持ち合わせているから、その後も、何人かの女とつき合いもあったが、結婚はしなかった。
（まだ、佐知子に未練があるのだろうか？）
久しぶりに、彼女と会って、梶は、やはり、心に動揺が起きたのを感じた。が、問いの答えは見つかりそうもない。
翌二十七日の朝、梶は、車で、今井の家のある保谷へ出かけた。
午前九時少し前に着いた梶は、車から降りると、故障車の目印を付けて、自分は、今井の家の方へ歩いて行った。
梶の計算どおり、今井の運転するブルーのＢＭＷが、ゆるい坂道を、下りて来るのにぶつかった。
梶は、手をあげて、その車を止めてから、相手に気がついたように、
「なんだ、今井じゃないか」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com